Topic

『石川県の百年』を書いて

林　宥一

A　橋本（哲哉）さんと石川県の歴史を書いたんだって？まだ読んでないが、君は他の県のこともやってきたから、仕事は容易だったろう。

B　そんなことはない。ぼくは、金沢大学に赴任して初めて石川県に住みついたのだから、当地の歴史は不案内だ。土地感というものが欠如しているし、史料探しもゼロから初めなければならなかったから大変だった。書きながら、これが、かって住んだこともあり、県史や市史の仕事をしたことのある埼玉県や、この10年ほど地方財行政史の共同研究を進めてきた長野県などの地域であれば、作業はもっとやりやすいのに、と思うこともあった。

A　そうかな。だいたい東洋のリリパットといわれるこの国の近代史を、埼玉や長野にそくして書こうが、石川にそくして書こうがそんなにちがうのかね。比較は適切じゃないかもしれないが、たとえばインドでパンジャーブやアッサムの歴史を書くのに比べれば、その歴史的な地域差はかえって絶望的なほどにマイナーなのが日本だとぼくは思うのだが。だいいち、民族も言語もちがう、宗教も文化も異なる、だからそれらの総体としての歴史も、現代においてさえ異なった国家形成の要因を孕むほどに相互に独立的である、といったような地域を内包する国に比べれば、どうということはないじゃないか。

B　いや、日本の歴史にだって、単一国家の形成が宿命的であったかのような通念に対しては、近年、反省がされている。中世史の網野（善彦）さんなんかの社会史研究は、そのような見通しをもつ議論だと思う。

A　ぼくの言ってるのは日本近代のことだ。日本近代史を念頭において、どの地域の歴史をきりとってみても、民族とか言語とか、国家の分離独立など、初めから問題にならないし、その歴史はきわめて均質なものだと思う。試みに、君たちの仲間が書いている本をみても、どの地域の近代史叙述も、幕藩体制の崩壊と維新政府の諸改革に始まり、資本主義の形成が描かれ、日清・日露戦争を経て表面化した社会改革への胎動があり、それが昭和恐慌でファッショ化へと暗転し、15年戦争を経て敗戦を迎え、占領軍主導の戦後改革にいたる、という構成になっている。どの地域の近代史もおよそこれ以外の構成ではない。まさに金太郎飴だ。だから、埼玉県や長野県の近代史が描ければ、石川県の歴史を書くのはさほど難しいことではない筈だ、というのがぼくの卒直な印象だ。

B　ずいぶん乱暴なことを言うね。金太郎飴だという君の意見は、日本近代史には結局のところただ一つの国家史があるだけで、自立した地域史などはないという主張になる。確かに、日本近代の歴史は、地域社会に対する国家的な囲い込みの過程であったというふうに描くこともできるし、事実、そのように描かれてきた。しかしそのことは、日本近代には国家の歴史だけがあって、地域社会の歴史など最初からなかったということではない。

柳田国男や伊波普猷や南方熊楠らの民間学の巨人といわれる人々の仕事は、まさに日本「社会」の発見にあったのだと思う。柳田は、

日本は「猫が屋根伝いに旅行をし得るような国」だけれども、やっぱり地方至る所には特殊な条件があって流行や模倣で行政はできぬ、と言っている（『時代ト農政』）。日本社会の自立的多様性への認識がなければ、あんな仕事はできなかった筈だ。沖縄の伊波は、「私達は歴史によって圧しつぶされている」ということばを好んだという（鹿野政直『近代日本の民間学』）が、このばあいの歴史は「国家史」だ。彼は幼少時に、廃藩置県にあって琉球「社会」が「歴史によって圧しつぶされて」いく過程を眼のあたりにした。しかし、だからこそ、「歴史なき県民」の記念碑的作品である『古琉球』が書かれたのだ。

A 君たちは石川県の伊波普猷というわけか。

B ずいぶんな皮肉をいうね。確かに、ぼくたちの本も君のいう「金太郎飴」の構成はまぬがれていないと思う。ただ、橋本さんが「あとがき」で書いていることだが、「地域社会」「民衆社会」に焦点をあてようと努力はしたつもりだ。橋本さんの書いたところでいえば、金沢における米騒動の背後にある労働者社会や中田邦造の公共図書館活動、ぼくの執筆部分では織物産業の地域的編成、などの主題を深めていけば、国家と社会の問題はもっと浮きぼりにできると思う。

「金太郎飴」に関してもう一言いわせてもらえれば、ぼくは、最近、歴史学の世界というのは本質的に固有名詞の世界だという気がしている。法則がひとり歩きするようなのは、ガイコツが人間でないように、歴史学ではないと思う。(これは、沖縄の玉野井（芳郎）さんが言っていることだが）真の歴史は無名の民衆によってつくられるというが、民衆にはみんな名前があるのだ。とにかく地域に近づくほど、無責任なものではなく、固有名詞の世界なのだ。沖縄では人間どころか木にも草にもみんな名前がある。そういったところで人間の生活はおこなわれているのだ。玉野井さんはこういったうえで、〝歴史の教科書はこれまでそういうローカル・ピープルの平和な生活をいったいどこまで描いてきたのだろう、経済学でも国民経済とか国民国家とかいって、そういうヒューマン・スケールに光をあてることを知らなかった、と批判しているのだが、同感だ。〝神は細部に宿り給う〟というが、今まで知らなかった石川の歴史を苦労して書いてみて、この言葉を改めて考えなおすことができたのが、ぼくの成果といえば成果だったように思う。

A 君はいま、歴史学は固有名詞を発見することだ、というようなことを言ったが、歴史学はそんな単純なことでは済まない問題がある筈だ。だいいち、こんにちの国際化の時代において、そういった視点からの歴史学が、どれだけ普遍性をもちうるのか疑問だ。

B 君はぼくの言ったことをまったく理解していないように思う。名前を発見することは単純なことだと言ったが、そうではない。あのヘレン・ケラーが、彼女に残されたすべての知覚を尽くしてwaterという名前を発見したこと、そして、すべてのものは名前をもっていること、世界は名前でできていることを知りえたことの感動を想起したまえ。君には『「名づけ」の精神史』（市村弘正著）という本を読むことをすすめておく。それから、君の言う「国際化の時代」についても、時間がないので詳しい話はできないが、ぼくは根本的な異和感をもっている。まあ、とにかくぼくたちの本を一読してくれたまえ。そのうえで、また議論をしようではないか。

（以上、議論は中途だが、とりあえず、反省をこめての自問自答。なお、『石川県の百年』は、山川出版社、1987年刊）

（金沢大学経済学部助教授）